

第5回 仙台市総合計画審議会起草委員会議事概要

この議事概要は、事務局の責任においてとりまとめた速報であり、事後に修正する可能性があります。なお、正式な議事録については、別途ホームページに掲載しますので、そちらをご覧ください。

日 時 平成22年5月12日(水) 10:00～12:00
会 場 仙台市役所2階 第四委員会室
出席委員 大滝精一委員長、江成敬次郎委員、小野田泰明委員、小松洋吉委員、
西大立目祥子委員、庭野賀津子委員、間庭洋委員、柳井雅也委員 [8名]
欠席委員 [0名]
仙 台 市 企画調整局長、総合政策部参事、総合計画課長、総合計画課主幹(1)
次 第 1 開会
2 議事
(1) 今後の進め方について
(2) 新総合計画の全体構成(素案)について
(3) その他
3 閉会
配付資料 資料1 新総合計画の策定に向けた審議会会長の所見
資料2 現総合計画の構成・内容と課題
資料3 新総合計画の全体構成(素案)

会議の概要

議事

(1) 今後の進め方について

- ・事務局から資料1を説明し、資料1記載のとおり今後進めていくことについて委員から了解を得た。

(2) 新総合計画の全体構成(素案)について

- ・事務局から資料2、資料3を基に説明し、その後意見交換を行った。

<主な意見等>

- ・資料3の3ページ「仙台の市民力」については市役所内でも議論があったとのことだが、どのような議論だったのか。

市民力が重要であるという合意を得たが、市民力で具体的に1項目立てるのが良いのか、あるいは「推進に向けて」に書き込んだ方が、市民力をもとに計画を進めていくという観点から良いのか、という議論があった。また、都市の将来目標と同じ並びで市民力という項目があることについて、構成上、位置づけがわかりにくいのではないか、という意見もあった。

- ・市民のニーズが多様化し、市民が自分たちの問題を解決することが必要な、自発と自治の時代として、「仙台の市民力」を単独項目として出すことは適切ではないかと思う。
- ・市民力という項目を入れることは賛成する。ただし、これまで仙台市では、市民力により問題

の解決などを実現してきたということを書き込み、強調すべき。そうでなければ他都市との違いがわからない。

- ・「２．仙台の市民力」と「４．推進に向けて」の関係性を意識すべき。市民力を評価することは大事であるが、市民力を鍛える、成長させるという観点も重要と考える。
- ・単独項目での位置づけは是非すべき。この項目の＜重視すべき視点（案）＞においては、これまでの市民力を生かすだけでなく、市民力を永続的に発揮していくにはどうすれば良いかという視点も必要。
- ・永続的に力を養うということを考えると、子供を市民に位置づけするということも、重要キーワードとして織り込むべき。それにより伝わりやすいメッセージになる。
- ・現行の基本構想は、策定の趣旨の次に都市像が来ているが、今回は都市像の前に市民力を入れるということでのよいのか。

大きな要素として市民力が必要という認識がある。この項目を都市像の前に入れるかどうかということについては、庁内でも特に推進との関係性から異論がある。例えば、「仙台の未来へ」の項目に市民力について言及し、あとは推進の部分に入れた方が良いという意見もある。

- ・市民力については「協働」という言葉の中身についても記載があった方が良いと思う。ただ評価を出すということではなく、行政とどのように組んでいくかが必要になると思う。
- ・「協働」という言葉には、２種類ある。一つは、市がリーダーシップをとり、それに市民が協力していくというもの。もう一つは、市と市民がイコールパートナーになる場合であり、そのときは市役所がどのような組織を組めるのか、もう少し議論しておく必要がある。
- ・「市民力」というものが今までと何が違うか明確にすべき。市民の考え方として、第一段階は従来型の地方自治で、市民は住民であり、住民は住民自治の基本的な権利があるというもの。第二段階はNPM（ニューパブリックマネジメント）であり、市民はサービスの顧客として考えるものであり、それが権利その２である。そして、今回の市民力というのは、市民を従来型の地方自治でも、NPMでもない、３番目の位置づけとしてどう定義するのが重要となってくる。ここでは、市民の定義は自律的な当事者であり、単なる権利者ではないということが特徴である。第一段階、第二段階の市民の考え方については、行政の仕組のプラットフォームができていますが、三つめの考え方では、新しい仕組を提示しなければならない。
- ・仕組の中身は二つあり、一つは市民へのエンフォースメントであり、市民に自律的にやってもらった上で経費は払うというやり方。このやり方は質が必ずしも担保できないこと、責任の所在をどうするか、といったことが課題であり、それをきちんとモニタリングして、フィードバックするという仕組が必要になる。もう一つは、代議員制である現在の仕組とどのように調整するかであり、これは大上段に構えても難しいことから、裏のテーマとして認識していく。
- ・将来目標の書き方として、まず市民力を鍛える、伸ばしていくために学び、はぐくみといった目標があり、その力を発揮するためには市民が基本的なことで守られている必要があることから、安全安心の目標がある。それだけではうまく進んでいかず、市民力に向ける方向性、ドライビングフォースが必要であるため、仙台の独自性・アイデンティティを掲げた目標がある。さらに、現在は仙台だけの活動では足りないことから、グローバル化や東北をにらんだ目標を掲げている。このように将来目標の書き方は良いと思うが、問題は仕組づくりの方である。

- ・ 3 ページの上位の理念・目標に使っている「杜の都」という言葉だが、街路樹はあるが本当に「杜」というのはあるのだろうか。その表現は使っているのか確認したい。
もともとの屋敷杜のようなものは残り少なくなっており、現在では多くの方がイメージするのは街路樹や青葉山を始めとする自然林のようなものだと思う。その意味で、要素は変わってきているが人の手が加わった樹木も含めた自然環境と都市機能が調和している仙台を表した言葉でもあり、また市民との協働で都市環境をつくってきたということも念頭にあり、「杜」という使い方は仙台にふさわしいというのが庁内の意見としては多い。
- ・ 今回、これまで「都市像」としてきたものを「将来目標」と変更しているが、この言葉は置き換えできないのでは。都市像というのは、今後どうありたいかというビジョンであり、一方、目標という場合には具体性が必要となってくると思う。ここでは、具体的なことをいうところではなく、象徴的な言葉でまずは示すという、位置づけの部分だと思うので、都市像若しくは都市像にかかわる言葉を考えた方が良くと思ったが、今回あえて目標とした理由は何か。
審議会において「都市像」という言葉が市民にわかりやすいのか、という意見が出たこともあり、また現計画の中でも都市像というのは21世紀中葉の目標と考えられるので、今回置き換えた。違和感があるのであれば、議論していただければと思う。
- ・ 「仙台の市民力」を計画の推進のところに入れるという議論もあったが、推進のためだけではなく、発展させるべき課題として市民力がある、と考えると、一項目起こす必要があると思う。
- ・ 都市像については、どの都市でも同じような書き方という意見が過去にあったが、それを解決するには仙台に関わる言葉を出していく必要がある。例えば環境の分野でいうと、「自然と調和し持続可能な潤いの都」といった表現ではどこの都市でも通用してしまうので、「奥羽山脈」であるとか、「杜の都」といった仙台に関係する言葉を使うと良い。
- ・ 人口フレームについては悪い方をとっていただきたい。
- ・ 横断的なものを取り込み、上位のものとしてアピールして欲しい。そういう意味では、重点プロジェクトを「検討」にとどめているのは気になる。分野別計画(2)の がソフト的な市民の暮らしに密着したところで、 が都市計画的なものとなっているが、ここをどのように横断的にプロジェクトとして立ち上げるのかが、基本計画で一番大事なところだと思う。
行政としても、横断的な視点で課題を解決していかなければならないという問題意識は全く同じだが、一方で政策体系として抜け落ちてはいけないとか、こういった責任のもとに体系化するかといったことを検討する必要がある、そのための具体的な作業を行政内部で行っていきと共に、その作業と並行しながら審議会や起草委員会のご意見を反映した形にまとめていきたい。
- ・ 基本計画の推進が5番目にきているが、今回アピールしていくポイントは市民力ということなのだから、前の方に持っていくのが良いと思う。
- ・ 現在の縦割り体制でも、当然関係部署との調整はあるが、我々が目指している横断というのはそれにとどまらず、市民目線でどういうソリューションができるのかということ。プロジェクトの中には期間限定のものも、持続的にしていくものもあると思うが、その辺りを整理してもらい、市民目線からできるものについては、極力前に持ってきて強調していくべき。
- ・ ある程度先が見通せて、増加基調にあるときは、今の行政の組織でもいろいろなことができると思うが、人口減少のように大きな変化が起きているときは、これまでどおりのやり方で対応ができなくなっているという問題が出てきている。そこを見据えた上で、問題のセレクトの

仕方、あるいは横断的なものとして何を取り上げるかといったスタンスを持った方が良いと思う。縦割りの中でもそれぞれやることはあるが、それだけでは大きな断絶が来るということが、次の10年にははっきりとしそうな感じがあり、そこを今から考えていかなければならない。

- ・区別計画を区主体でつくるとするのはよいが、隣同士の町内会でも違う要素がたくさんあるので、計画をつくる前に、きめ細かな聴き取りなど、市民参加型で決めていければよいと思う。また、区からあがったものを、どのように次の課題として取り上げるかが重要だと思う。

- ・区別計画はある程度動き始めているのか。

地域特性の現状分析をして課題を洗い出し、それに基づく地域政策の拡充に向けた検討は昨年からは進めている。総合計画は今年度内に策定するスケジュールなので制約はあるが、計画ができたなら終わりではないので、地域協働で進めていきたい。

- ・例えば、泉中央のベデストリアンデッキで店を出そうとしたときに、区には応援いただいたが、実際に動かそうとしたら、道路扱いなので規制が多いなど、産業活動での制約が多い。区別計画を区が主体にと書かれていても、権限の問題で現実として区ができることは少ないので、支援が必要ではないか。

- ・フレームとして、人口フレームがあげられているが、環境、特にCO₂の排出については環境局だけではなく全市的なものであり、フレームとして意識し、しっかりと位置づけるべきではないか。

- ・分野別計画の分け方については、二つの分類で対応できるのかどうかということを議論しなくてはならない。大きく響いてくる部分について一つの項目立てをしていくというのが通常の考え方だと思う。例えば、都市の魅力であればハード整備と経済的側面に分けた方がいいこともあり得るが、そうすると三つの分類となってくる。横断と考えると分けない方がよいので、その辺りが議論のポイントになると思う。

従来だと、都市像の四つの柱に沿って政策の体系をつくってきたが、それを少し横断的な視点を盛り込みたいという目的で組み直したのが第一点。そのため実際にはこの2つに分かれても、これまでの縦割りに沿った形で施策の体系化ができる一方、横に見ていく場合には「市民の暮らし」というものの否が応でも見ていかなければならないことになる。

もう一点は、この二つで分断されるところにこそ横割りの視点が必要だと言う意見が先ほどあったが、まさにそのとおりで、この二つを分けることによって、どういうところを結び付けなければならないか、どこが足りないか、といったことがより明確になるのではないかという視点がある。

- ・四つに分けて縦割りというが、これは結構大きな分類であり、横串で語るべき視点はもう少し個別的なもので、レイヤーが違うのではないかと思う。四つだと縦割りだから三つにした、というのはほとんど意味がなく、かなり下のところに横串をどうすべきかというプロジェクトが眠っていて、問題はそれをきちんと設定できないところにある。川上では、縦割りと言われようが、予算や法律に基づき分野別にせざるを得ないと思う。しかし、川下で硬直的に対応するから批判を受けるので、それを無くしていく必要がある。現場でどうやってフレキシブルに対応できるか仕組の問題だと思う。基本計画の推進の取組の中に、横断的なプロジェクトを評価してかつ適切にやれるような仕組を入れるべき。

- ・縦割りできっちりした方がよいものもあるし、横断的に横串にした方がいいものもある。それ

の仕分けを市民参加で決めた上で、どういう仕組みで組織をつくるか、それをどうやってレビューして市の仕組みの中にフィードバックするか、というのが書かれていればいいのではないかと思います。

分野の話については、将来目標のとおりのできる体制で政策を推進するとした場合、政策体系のアンバランスが出てくる面がある。また、市民の目線で見た場合に、自分自身の暮らしている地域の観点からと、都市全体を俯瞰する観点から、それぞれ政策の流れを示すのが、わかりやすいのではと考え、このような体制とした。庁内的にもどのような施策があるか具体的に拾いつくしてみないと見えない部分もあり、引き続きそういう作業と並行して議論をいただきたい。

- ・基本計画の推進について、庁内の組織もより効率的、機動的な体制というところまで組み込まないと難しい部分があると想定されるが、そういったことも含んでいるということによりよい。推進については、それを実際に担保するような仕組みの問題と、手法面として市民力を生かすといった制度運営的な部分の両面がある。具体的な仕組みとして一体どういったものを構築できるのかということを見定めながら、同時並行的にやっていかないといけないと思っている。
- ・横断的にやるということは、人材と税金の重複投資を小さくする効果も出てくるので、そこにも少し注目していくべき。
- ・基本計画の推進部分にも、行財政改革の推進ということが入っているわけなので、組織そのもののあり方を変えていくといった話はあってしかるべきだと思う。ただ行財政改革の推進といったときに、何をどこまでということについては、もう少し検討した方がいいと思う。
- ・今回のような市民力や自律的当事者というかなり抽象的な概念で、これから作り上げていかなければならないものと、行政の仕組みをシンクロしていくということとを、同時に行うのは少し危険な気がする。そうではなく、自律的当事者というのは一体何なのかということとをパイロットプロジェクトできちんと作り、そこに積極的に投資して横串の組織を作り、それを実際の組織にフィードバックするとどうなのかということの10年間実際やりながら、その成果を市民に公開する、といった目標を提示することが必要。
- ・基本計画の中で行財政改革の具体的な設計図を描くのではなく、改革の方向性とかそれと市民力の関係性ということとをここに書いていくということだと思う。

行財政改革については、新しいプランを今年度から5年間の計画として既に策定しているという状況もあり、そういった方向性を組み入れて進める必要はある。自律的当事者としての市民力をさらに高めて生かしていくということを含めて、どのような仕組み入れるということだと思う。

- ・行財政改革とは対立するような部分も出てくると思う。市民力を生かすためには、呼び水として計画費なり調整費を投入しなければならず、また市民力が育つには時間がかかるので、10年くらい経ってようやく直接経費が減るというふうになるが、財政はそこまで考えず、できるだけ切りたいという話になる。そうであれば、公共投資のグレードを下げるなど、もっと違うところでコストを浮かせて、経営体の方に投入するべきだと思うが、これだけ財政状況が厳しいとそれを言っても絵に描いた餅になってしまう。だから、パイロットプロジェクトでそれを証明して、フィードバックしてもらおうというふうにはやらないとなかなか実現できないので、そこを痩せさせないように行財政改革とプロジェクトは直接リンクさせるべきではない。今、パイロットプロジェクトにお金を投入しておけば、将来足腰が強いサステナブルな、経費が削

減できる仕組ができる、ただしそれには10年くらいかかる、というような筋道にすべきと思う。パイロットプロジェクトに関しては、お金をどれだけかけられるかは、確かにまだわからないが、組織を変えなくても発令を変えて職員を一時期に集める仕組など、内部で議論を行っている。また、そのプロジェクトの中で積み重ねを次にきちんと残して、別の事業に広げられるような仕組を考える必要があると思っている。

- ・(現行では施策体系が基本構想の中にも入っていたが、今回の案では基本計画で施策体系を具体化する点について) 前よりはすごくよくわかりやすくなっていると思う。
 - ・「将来目標」の表現は疑問。書き下すと「目標達成のために求められる都市像」と考えられる。都市像と書くとなかなりフィジカルなイメージがあるが、方向性を包含したものをイメージすると、都市ビジョンというのはどうかと思う。
 - ・都市像という表現が市民にわかりにくいのであれば、「仙台の将来の姿」といった言葉に言い換えることはできると思うが、ただそれだけの話ではないのだろう。目標というと何か限定的なイメージがあるので、ここに書いてあることとはちょっと違うんじゃないかという印象を持つ。
- ご議論やご意見を踏まえた上で、全体的に見直しを行い、委員長と相談させていきながら修正を加えていきたい。
- ・例えば、資料3の3ページ「仙台の将来目標(1)」にあるキャッチコピーについて、「住む」ということは良く使う言葉だがちょっと狭い意味になってしまうので、働くことも含む「暮らし」の方が幅がはるかに広いと思う。また、暮らし続けていくという背景に、働くということがあり、雇用という言葉は必ずしも経済的な行為だけではなく、市民力ともつながるものなので、今後まとめていく中で、意識していただきたい。

(3) その他

特に議題は出されなかった。